

(文献)

- 浅田照行(2008):阿武山観測所における地震計等観測機器の展示, 京都大学防災研究所技術室通信, 第 10 号 <http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/~dpotech/gihoh/gihoh10/01asada.pdf>
- 三雲健・大塚道男・神月彰 (1957) : 和歌山地方で観測された微小地震の性質について, 地震 II, **8**, 158-160.
- 三雲健 (1970) : RC 回路をもちいた長周期地震計の特性, 京都大学防災研究所年報, 第 13 号 A, 121-132.
- 佐々憲三 (1940) : 気象諸変化に起因する土地昇降変動について, 天文学及び地球物理学
邦文輯報, **1**, 17-26.
- 佐々憲三(1944) : 鳥取大地震前後の土地傾動, 科学, 第 14 巻, 第 6 号, 220-221.
- 佐々憲三・西村英一(1951) : 地震の前駆現象 I, 科学, 第 21 巻, 第 2 号, 86-88.
- Sassa H., I. Ozawa and S. Yoshikawa (1952): Observation of Tidal Strain of the Earth by the Extensometer, Bull. Disast. Prev. Res. Inst., Kyoto Univ., No. 3, 1-3.
- 杉政和光(2001) : 阿武山観測所についてー伊藤勝祥研究支援推進員に聴くー, 京都大学防災研究所技術室通信, 第 3 号, 73-78.
- Takasu, Ken-ichi(1949) : Microclimatic Study.I. A New Type Self-Recorder., Memoirs of the College of Science, University of Kyoto, Series A, Vol.XXV, No.2, 69-73
- 竹本修三・James MORI・Luis RIVERA・Julien FRECHET (2010) : 京都・上賀茂観測所で使用されたレボイル・パシュウィツ式傾斜計の変遷, 地震, 第 2 輯, 第 63 巻, 第 1 号, 45-55.
- 地かく変動部門 (田中 豊) (1967) : (地震に伴う地殻変動の国際共同観測 (序報)、京都大学防災研究所年報第 10 号 A, 77-111.
- 林 一 (2002) : 京大阿蘇火山研究所・阿武山地震観測所草創期物語, (自費出版, 120p.
- 松尾 成光 (2004) : モノづくりと実験・観測, (自費出版, 181p.

(付記) 上賀茂地学観測所時代の今井 漆 氏

(竹本修三)

今井 漆 (いたる) (1906-1990) は長崎で生まれ育って、1926～32 年に東京天文台に勤務し、理科年表系の神田茂室長のもとで彗星の軌道計算などを手がけていた。その後、1932～43 年には新城新蔵が所長の上海自然科学研究所で、主に中国科学・技術史の研究に従事した(永野・佐納, 2010)。1943 年に風土病による腸疾患の病を得て帰国し、京都で療養していたが、1951 年に西村英一のもとで上賀茂地学観測所の技官となり、1971 年に定年を迎えた。

1964 年、大学 4 年生のとき、私は上賀茂地学観測所の木造の観測室に 1 年間住んでいた。観測所の位置は、京大吉田キャンパスから北北西に約 4.5 km 離れており、市バスの終点の深泥池から円通寺に向かう峠道の鞍部に近いあたりから西に入る踏み分け道を 300m ほど歩いて登ったところにある。下宿代が要らないこの観測室には代々学生や若手の助手が住んでいて、私の前には狐崎長琅さんや尾池和夫さん、私の後には今脇資郎さんなどが住んでいた。この木造の観測室は、ウィーヘルト地震計などが設置されている石造の観測室の南側奥にあったが、ここから 70m ほど手前に降ったところに技官の官舎があり、そこに今井 漆さんが 奥さんと息子さんと三人で住んでおられた。

その時代の今井さんは、午前零時頃にウィーヘルト地震計の煤書き記録紙を交換した後、朝まで本を読んでいて、昼は寝ているという生活だった。当時私は、今井さんが何に心血を注いでおられるのかもわからず、仙人みたいな人だな、と思っていた。その後、私は防災研究所の助手になり、私自身も天ヶ瀬観測所などで地震計の煤書き記録紙を交換したが、上賀茂で見た今井さんの煤書記録のようになんてきれいにいかず、大分苦勞をした。今井さんの煤書記録は、煤のムラがなく、糊の貼り合わせ部分も紙がほとんど盛り上がっていない。名人芸というのはこういうものかと思う。

今井さんの人柄と業績に関して、東京天文台時代の同僚であった大崎正次氏が国立天文台ニュースにエッセイを遺している（大崎, 1995a）。それによれば、上海自然科学研究所時代の今井さんは、天体の軌道計算のほか、中国科学・技術史の領域にも踏みこんでおり、『その後、京都で療養中に刊行された「中国物理雑識」（今井, 1946）は、小文の集積とはいふものの、難解な中国文献を読みくだき、博引傍証、考証をゆるがせにせぬ彼独自の学風を確立している』と評している。また、大崎氏は、上海時代の今井さんに関して、『測地測量その他の仕事で、中国のあちこちを、風を得た蝶のように飛び歩いた十年間は、最も楽しかった時代だったようである』とも述べている。

このエッセイによると、私が上賀茂でお会いした頃の今井さんは、日本、中国、朝鮮の天文年代学から、トルコ・ベルシャ・アラビアにまで興味の対象を広げていたようで、日本・中国が耶蘇会の宣教師を介して受容した西欧の天文学的宇宙観・世界観や、大航海時代の天文航海術の歴史とそれが中国や日本に与えた影響などを調べておられたようだ。

上賀茂観測所時代の今井さんは、上海自然科学研究所で一緒だった人文研究所の藪内清教授らのグループと親密な交流があり、1970年に藪内教授の退官記念で出版された「明清時代の科学技術史（藪内清, 吉田光邦編）」の17篇の論文の中に「今井湊：乾坤体義雑考」（今井, 1970）が含まれている。人文研究所の部内誌「人文」第1号（1970）の4ページに記載されているこの本の書評によれば、「乾坤体義雑考」は、「『乾坤体表』の数学的性格を評価しつつ、これがクラビウス C・Clavius の『サクロボスコ天球論注解』におもに依拠することを明らかにし、その基礎的要素を分析した論文である」という（<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/57127/1/jid001.pdf>）。

今井さんは、1ドル360円の時代にユネスコを利用し、史料的原典、研究書を直接出版元、古書店から買い求め、膨大な蔵書を残したが、今井さんの没後、この貴重な遺産は大崎氏らの努力で整理され、国立天文台に寄贈された。それらは現在、『今井文庫』として国立天文台に保管されている（大崎, 1995b; 中村, 2000）。

さらに、数学史家の小寺 裕（ひろし）氏に教えていただいた情報によると、今井湊さんのわが国の数学史への貢献としては、日本数学史学会編の「数学史研究」に、「二儀略説の水晶天球儀など、（1960）第3号」、「元忽列的はユークリデスカ、（1960）第6号」、「和蘭平天儀（1964）第2巻第9号」、「弧矢術考原（1972）通巻52号」のほか、「近畿数学史学会会誌」和算（1971）に「水度神社算額の周辺」などを寄稿しているという。内容の理解までは到底及ばないが、京都の地球物理学教室にはこういうユニークな先輩がいたということを記録にとどめておきたい。

（文献）

今井湊(1946)：中国物理雑識，全国書房(大阪)，200p.

今井湊(1970)：乾坤体義雑考，明清時代の科学技術史(藪内清, 吉田光邦編)，京都大学人文科学研究所，35-48.

大崎正次(1995a)：今井湊君のことども，国立天文台ニュース，No.44，6-7.

大崎正次(1995b)：今井いたる氏の遺書目録についてのコメント

<http://library.nao.ac.jp/kichou/imai3.html>

永野宏・佐納康治(2010)：上海自然科学研究所物理学科と京都帝国大学理学部との関わり，京大地球物理学研究の百年，国際高等研究所・竹本修三フェロー研究会集録，117-131.

中村士（2000）：今井いたる文庫，<http://library.nao.ac.jp/kichou/imai.html>